

ねずみくんは、なえぼこにかけてあったかみを、ばらりとめくった。

そのとたん、

「わーい、ほく、いま、うまれたよ！」

と、おおきなこえがした。

こえのぬしは、だれかって？

なんと、たねからめをだしたばかりの、はくさいほうやだったんだよ。

はくさいほうやは、ねずみくにむかって、こんなことをいった。

「はじめまして！ きみ、ほくのともだちになってくれる？」

「え？ ともだち？」


「そう、ともだち！」

「う、うん、いいよ……」

ねずみくんは、おもわずうなずいていた。

はくさいほうやが、あんまりうれしそうに、

「ともだち」っていうものだからね。

An illustration of a mouse in a cave-like kitchen. The mouse is standing on a small stool, reaching for a bowl on a table. The kitchen is filled with various items: a large basket of yellow food, a red pot on a stove, a shelf with jars, and a large green jar. The scene is lit with warm, yellow light.

はたけのすみっこに、
ねずみくんが、すんでいたんだよ。
ねずみくんは、ひとりぼっちで、
きのむくままにくらしていた。
けれども、ときどき、むねがすうすうして、
しかたがなかったんだって。

そらがおおくすみきった、あきのあさ。
ねずみくんのおなかか、くう〜とおおきなおとをたてた。
「そうだ、おひゃくしょうのビニールハウスにいったみよう。
おいしいやさいが、あるかもしれないぞ」
ねずみくんは、すあなをでると、ビニールハウスへとほしっていった。





じつは、おずみくんには、しんばいなのことがあった。
おひやくしょうが、はたけにやってきては、
ふとっちはくさいからじゅんに、とっていってしまうことだ。
「はくさいほうやまで、つれていかれたらどうしよう……」
けれども、うんのいいことに、はくさいほうやは、
いつまでも、はたけにのこっていた。

やがて、おずみくんのすあなのいりぐちは、華やかおどろかれるようになった。
「はくさいほうやは、さむくないかな、さびしくないかな」
おずみくんがのみをすすすと、はたけのほうからは、
かすかにこえがきこえた。
「はくは、はちまきはくさいだ！ まけんぞ！ まけんぞ！」
そのこえをきくたびに、おずみくんのからだに、
むくむくと、ちからがわいてきたらだって。